

蠹魚——使用頻度の高い文字「之」字の変遷——

角 田 健 一 (大 塚)

TSUNODA Ken'ichi (Tajō)

稚作は唐文献『占星堂集』の一節に見えることば「奪之蠹魚之口、襲之篋笥之腹。」(之を蠹魚の口より奪い、之を篋笥の腹に襲む。)を題材に制作したものである。

しろめたういとほしきことどもなり。

「蠹魚」とは昆虫の紙魚(シミ)の別称で、体型が魚に似ていて紙に害を及ぼすことのように呼ばれる。俳句で目にしたり、古書や掛け軸に害を及ぼしたりする虫、という程度の認識しか持たなかったが、実際には紙魚は紙ではなく糊の部分を好むようで、紙を劣化はさせるものの穴を開けるまでの害はもたらさないようである。驚くことに約三億年前から存在しているらしく、『源氏物語』四十帖・橋姫でも以下のように登場する。




紙魚といふ虫の住処になりて古めきたる黴くささながら、跡は消えず、ただいま書きたらんにも違はぬ言の葉どものこまごまとさだかなるを、見給ふに、げに落ち散りたらしよ、とう

紙魚という虫の棲み処になって、古くさく黴臭いけれど、筆跡は消えず、まるで今書いたものとも変わらない言葉……と遡ること千年前から現在と変わらぬ存在として詠われている。また転じて、本ばかり読み、真意を知らずにこれらを活かすことが出来ない才能の無い人にもこの言葉を用いるようで、題材の「蠹魚の口より奪い」は、これにもまた通ずる言葉でなかなか考えさせられるものがある。

◆
題材として選文したことばには「之」が四字ある。「之」の字形の使い分けは王羲之《蘭亭序》が有名だが、実はそれ以前にも「之」に限らなければ、意識的・審美的要素か否かは別として殷周金文から同一の銘に見られるし、秦簡や漢簡の木簡・竹簡などにも間々、

同一簡に見られる。後漢の《永元器物簿》も「之」の異形の文字が複数確認できるが、いずれも縦長に文字を伸ばす字形で、「敢えて之を言う」の部分で用いられる。漢代木簡には他にも「也」、「命」、「年」など縦に極端に伸ばす字形がある。文末の「也」、年号を示す「年」、「之」や「命」等は、その前後に大事な内容が記されたりすることが多いから、目につきやすい字形で書いたとも言えるだろう。これについては稿を改めていずれ論じたい。また王羲之以降、特に宋代以降の作家は異なる字形で「之」字を用いるのは至って普通のこととなっている。

使用頻度が高ければその字形変化（変遷）は当然加速する傾向がある。同時代・同時期であっても使用頻度が高いとその字形の変化が早まることや、字形の安定化が進むことは西周金文から始まっているが、基本的に金文や小篆という書体は書写する「速度」によって変遷の影響を受けることはない。単に一部の筆画を省略するケースを除けば、だいたい無関係である。

「之」字は篆書、例えば《石鼓文》では「」のように書くが、驚くことに同時期の《里耶秦簡》に「」の如く、背が高く最終画を右下に払う字形が現れる。ちなみにこの《里耶秦簡》では「」のような最終画を横画で書く文字も多数あり、これら最終画を右に払うものと横画に引くものが同一簡に混在するケースす

らある。少なくとも漢代では概ね右はらいの斜画になり、前述の永元器物簿のように縦に伸ばす文字も少なくない。実は「之」を除けば、篆書で最終画が直線的な横画で終わる文字は案外、その後の隸書・草書への変遷でもしつかりとした横画で終わることが多い。「之」字に限って言えば、草書の中には更に縦への傾向が強くなってほぼ縦画のみの字形も現れる。最終画の横画から斜画、更に縦画へ、という変化は書写速度という関係と、使用頻度の高さという両方の影響がなければ起こりにくい現象であったらう思う。

制作にあたっては意識的に「之」字の字形を変えらるというより、作品効果への影響に留意した。墨、紙などは日頃使い慣れたものを使用、書体に限らず常に作品に宿るべき生命感・躍動感を追いかけている。



奪之蠹魚之口、襲之篋笥之腹。

158.5cm × 41.6cm